

那須古碑及下上侍塚記事  
同碑釋文  
新井君美述

完

子 10  
4109



下野  
那須碑及下土侍塚紀事



子 10  
4109  
巻

那須國造碑  
坐石山建立次身

下野國那須郡

延宝四丙辰四月湯津上村より直順と云出家重貞身  
兼の咄く久湯津上村より言き四天餘の古碑茂草の  
間より有り里人近づきつゝ怪我あり事有り得て馬  
を法を承りて其是とくらし或は口より血を吐事成  
たり如何なるも常体の石碑と云ふ事定て言貴の  
石碑と存すと物語の重貞早速行て石碑の苔を  
寸量あり碑文と歌渡記に寫至其後天和三年亥  
六月七日西山操馬以村より成遊ばさる歌渡記の尋

依て同八日の朝市川畔禪反の九次より括上り上流より  
石碑の儀委細之より括上り之儀有西前より右石碑の  
次第具より上之儀後自身享四卯九月十四日馬路村より  
成るるに其形湯津上村石碑の建之の儀有  
其儀出併地領之儀有西入申之儀有上より其下之儀有  
其自身名代より建之の儀有崇号令取平内記及  
安及九帝右馬路及大之儀其代官抱り又之儀及之儀  
合三人より湯津上村者より方より其領之儀有西無之儀  
延引元禄四年末二月右側より湯津上村者より方より

重貞澄文遣之在右村者之方より重貞より澄文入る  
依り助之而及抄平より其領之儀有西之儀番西山極へ之儀  
其窺其自身より度より其登り上之儀有上より金山材木  
其外諸人より入用道具之儀有之儀所より方村新右馬路及  
其出抄平より其遣番其自身より其渡より其重貞  
水戸往來仕り其領之儀有西傳之儀有澄文より其  
三月より其無之儀有申四月七日迄より車隊より其  
其より其仕之儀有十日其上り西山極より其目見仕之儀  
其領仕之儀有在歸之儀有越禪師より其石碑之儀有

物多々重負ふ所より三日の遠道と述ゆ戸へ山帰る所  
湯津上村より有る所文の勘定は所持上よりして  
方への書習ふ所なり

### 下侍隊の馬

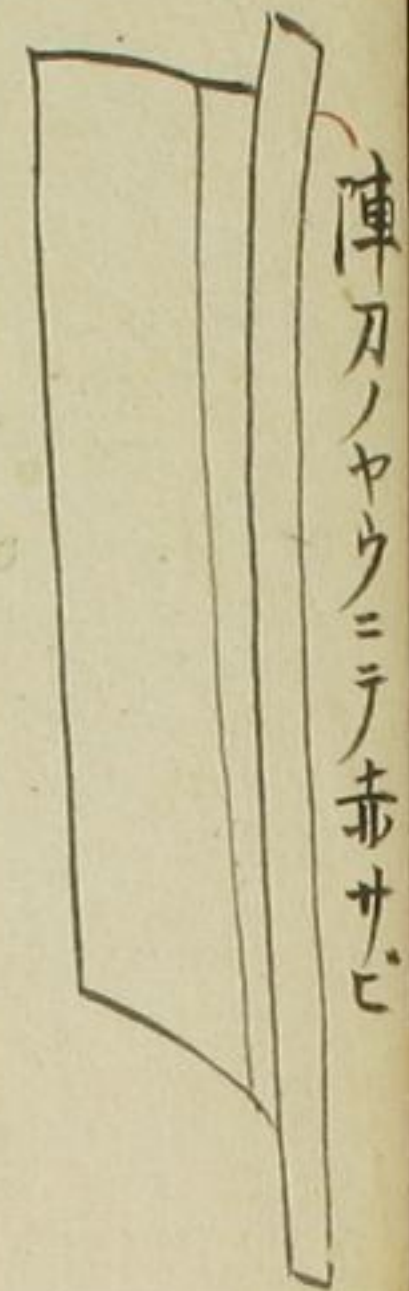
石碑より五所程下より大塚あり中川より上の方より  
あり隊やうをそと下侍隊と云川上よりあり上侍隊と  
云ふ所より下侍隊と云事難知此隊要所の上下  
ありあり下侍隊といふ所程二丈余はより南へ北へ  
東西五間前より後出上手有り拾五間下車隊と云

### 上侍隊の図

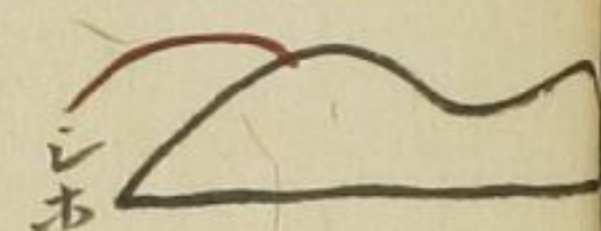
下侍隊より六丁程下より大塚あり中川の下下侍隊  
より南方よりあり此隊系北方よりあり上侍  
隊と云以上車隊とも云隊より三丈餘南北三拾間東  
西二十八間後出上手一丁此外は此隊の形より後  
より山隊よりあり石堂隊からありと隊よりあり  
隊よりあり

右ハ上侍塚より出の物如此仕立西山様へ指立

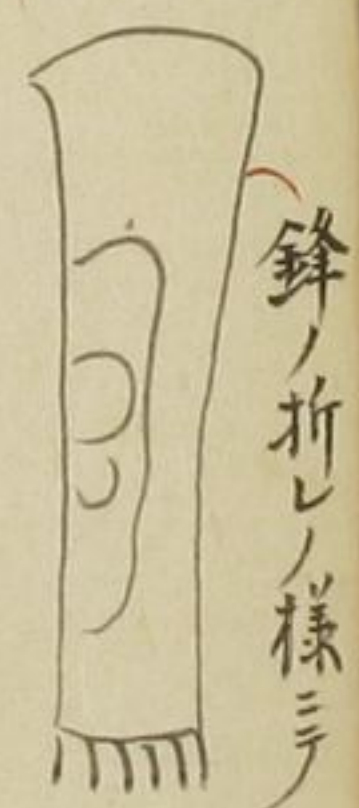
鉄



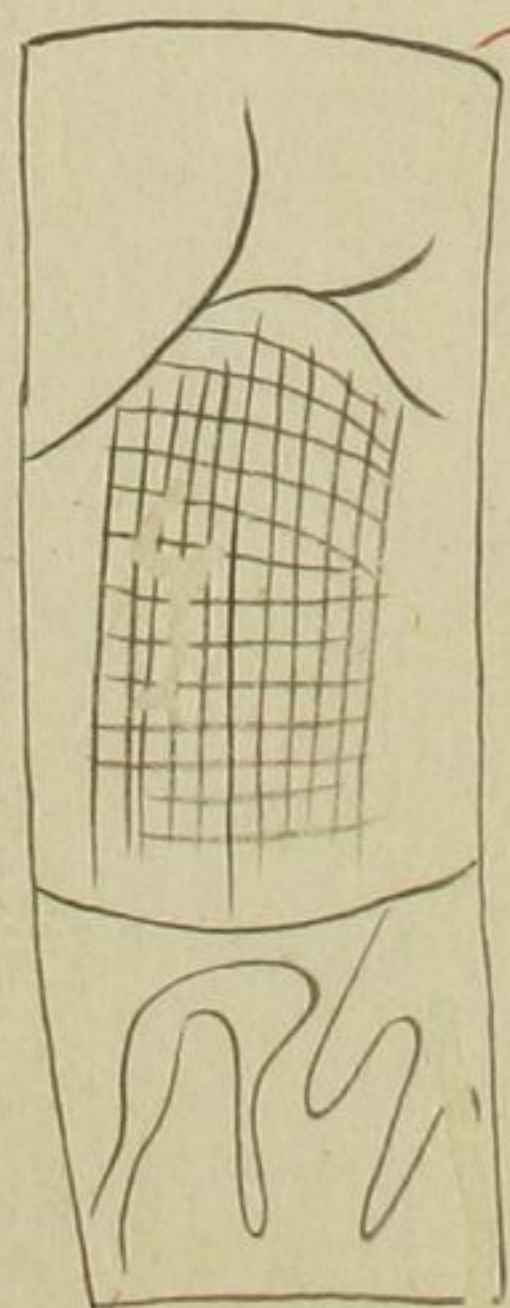
陣刀ノヤウニテ赤サビ



シホ手ノヤウナルモノ



鋒ノ折レノ様ニテ



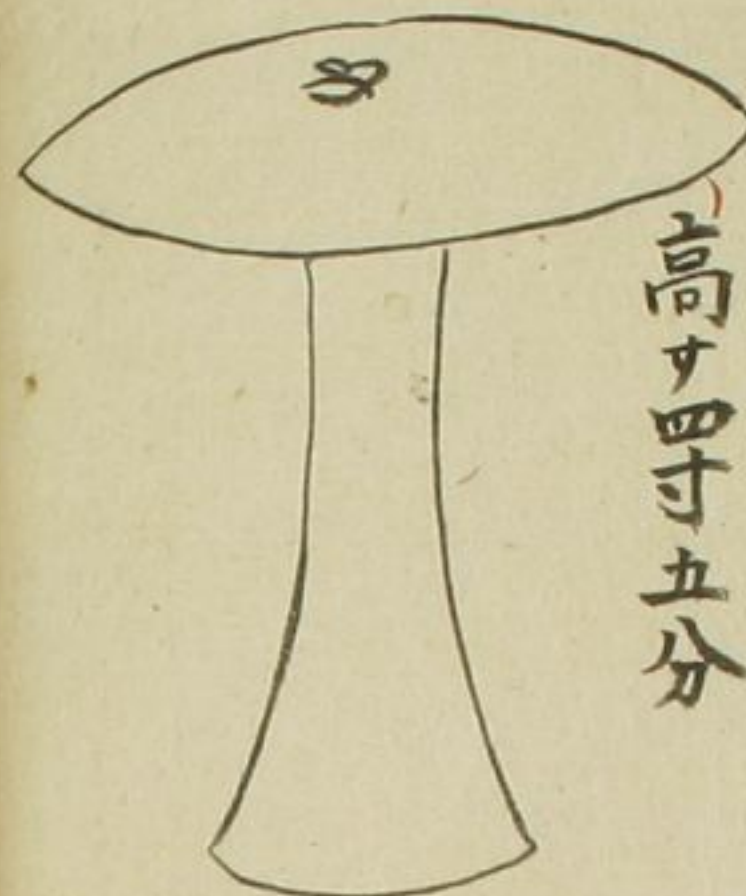
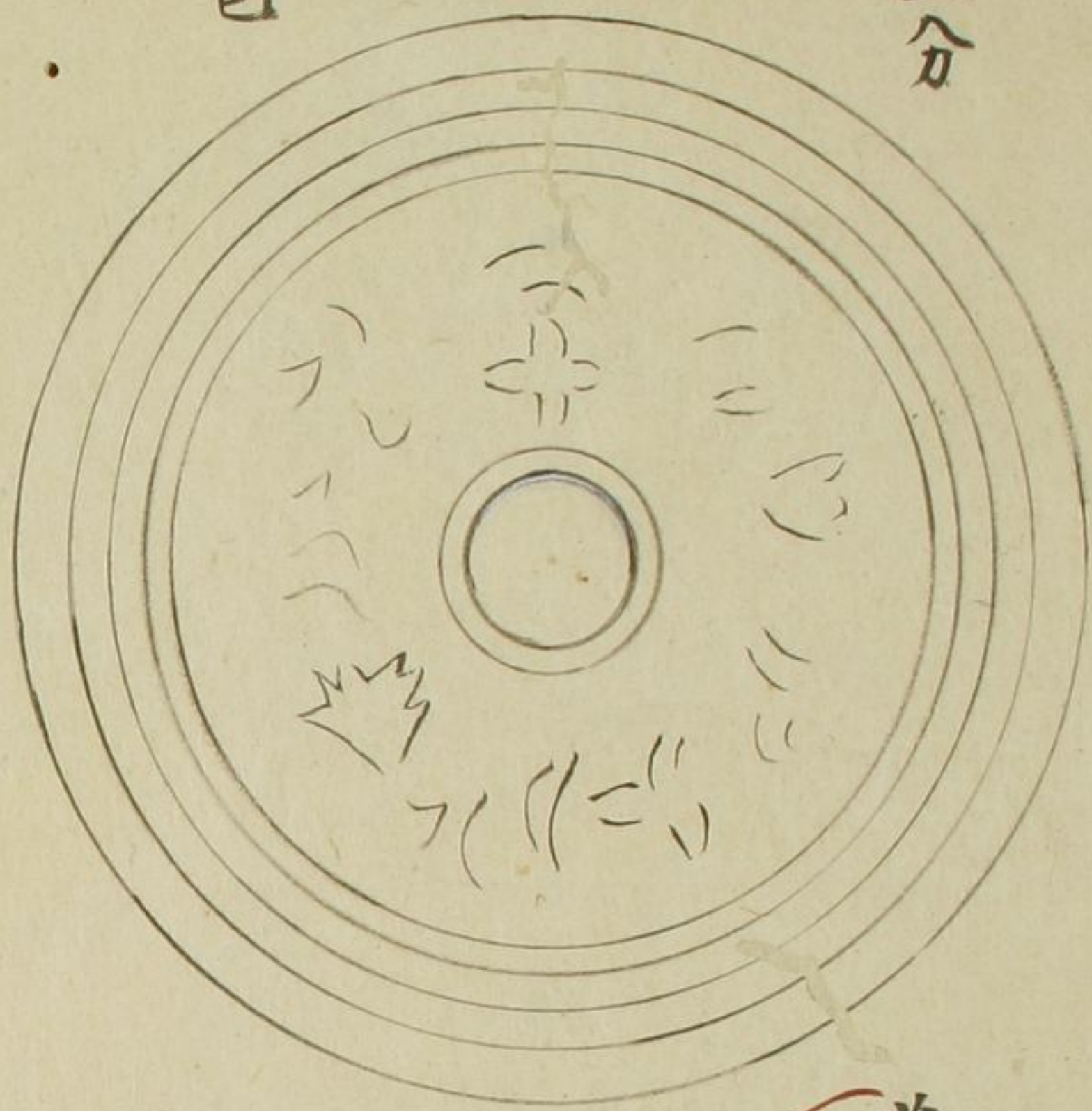
太刀ノ折ノ様ニテ赤サビ

衣ヲ如此卷ノ跡アリ

赤銅色

鏡

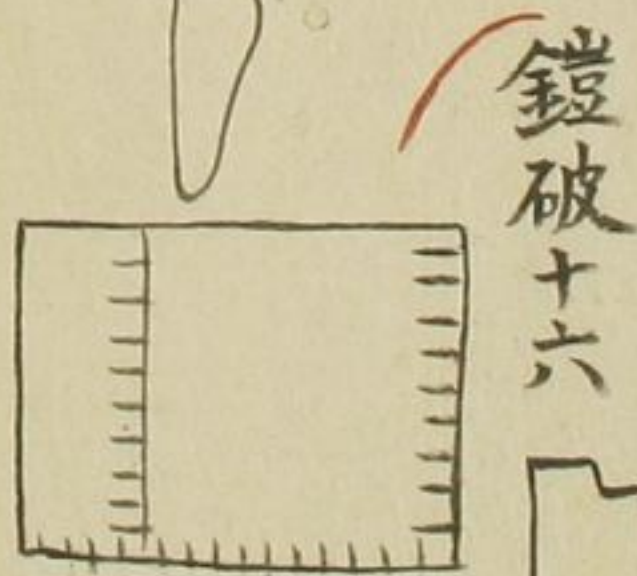
五寸二分



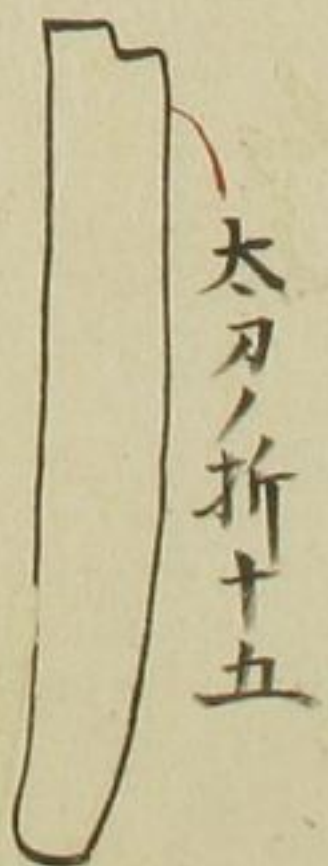
高サ四寸五分



鉄ニテ

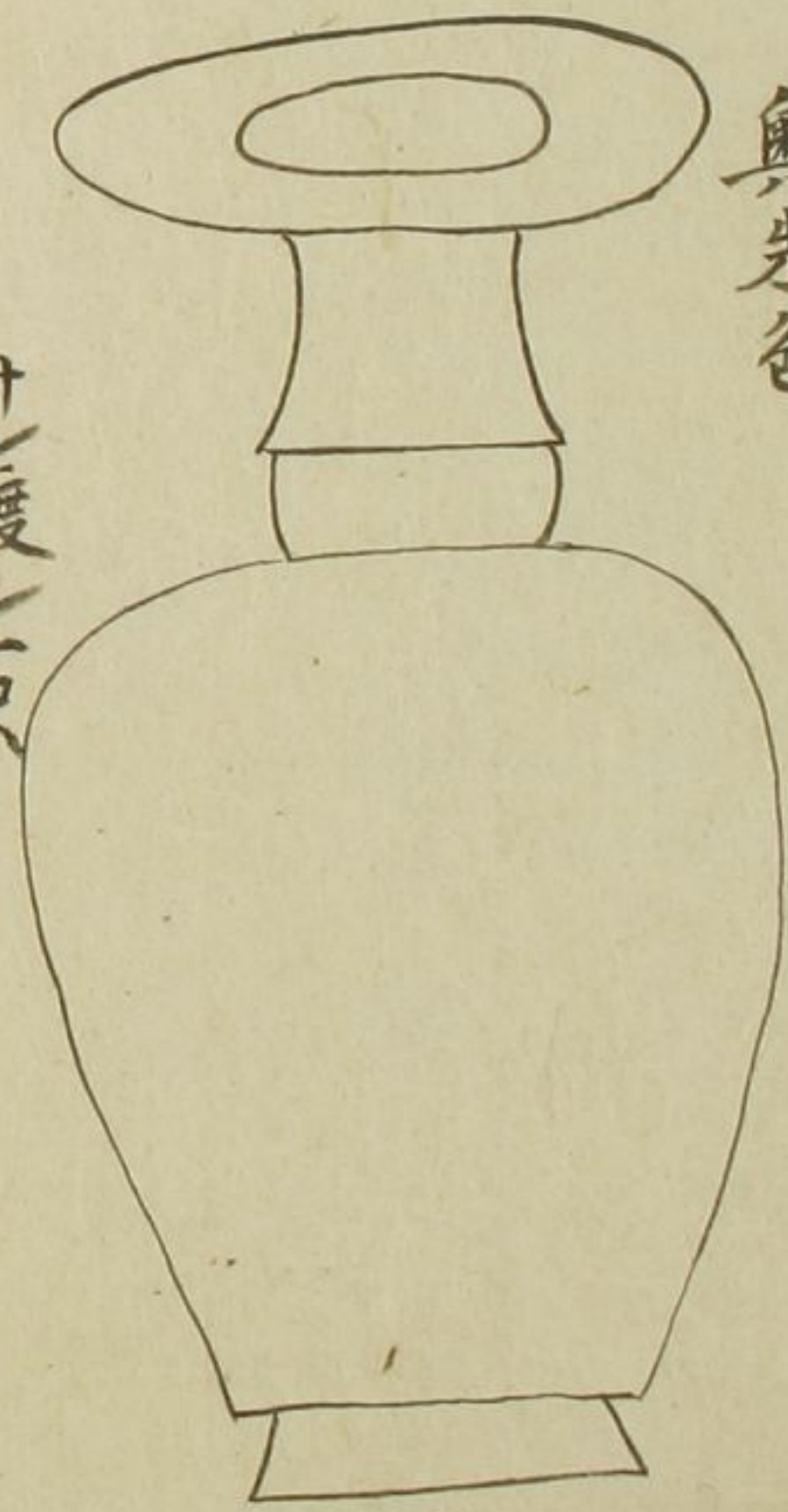


鎧破十六



太刀ノ折十五

寸渡シ一尺



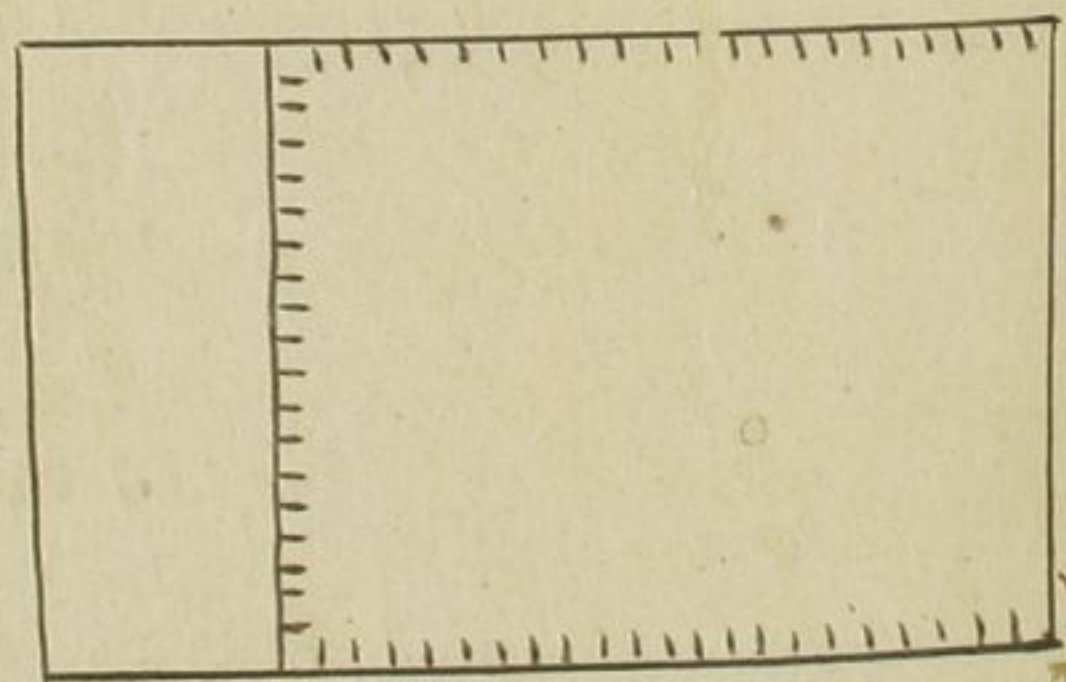
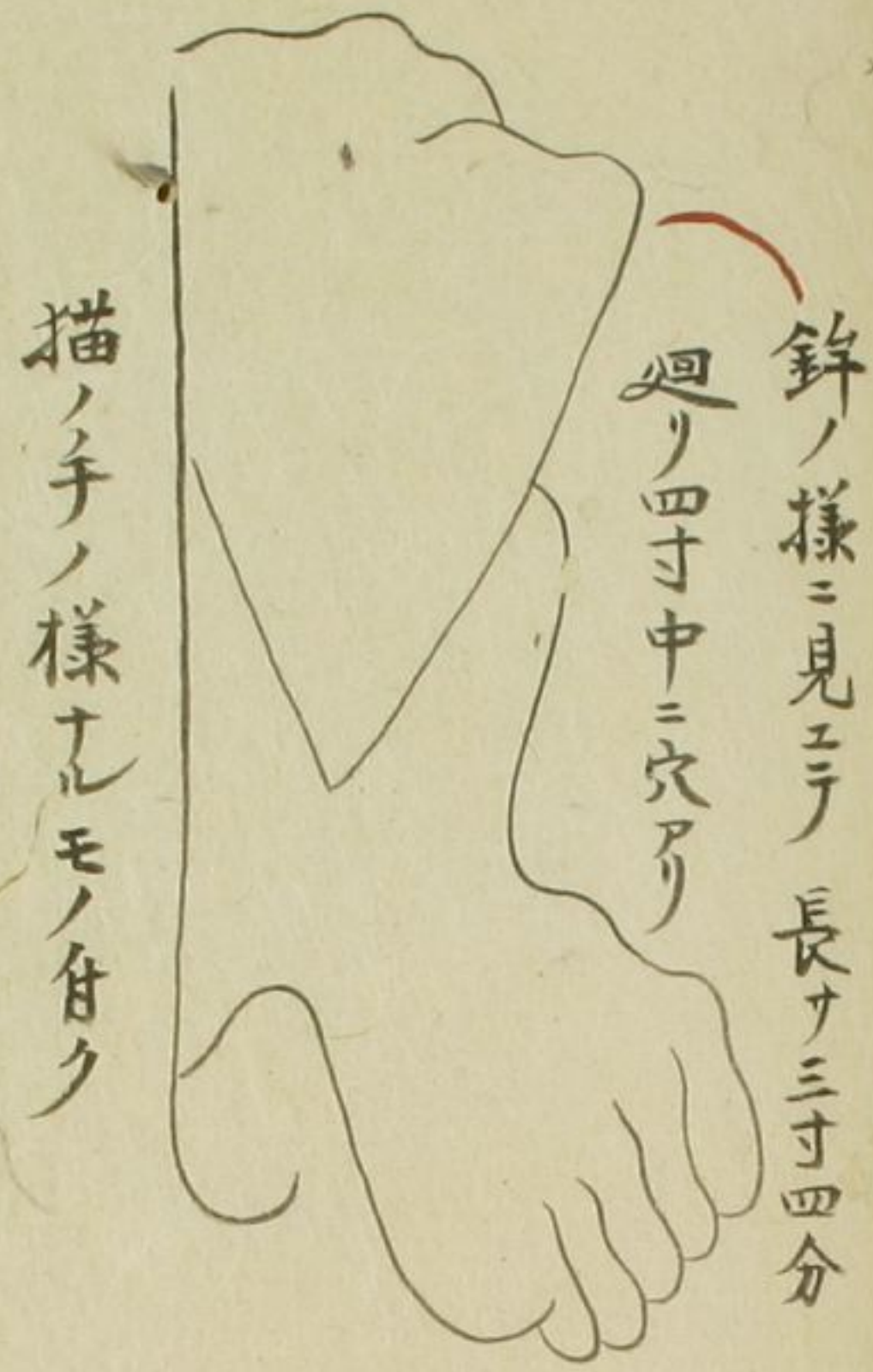
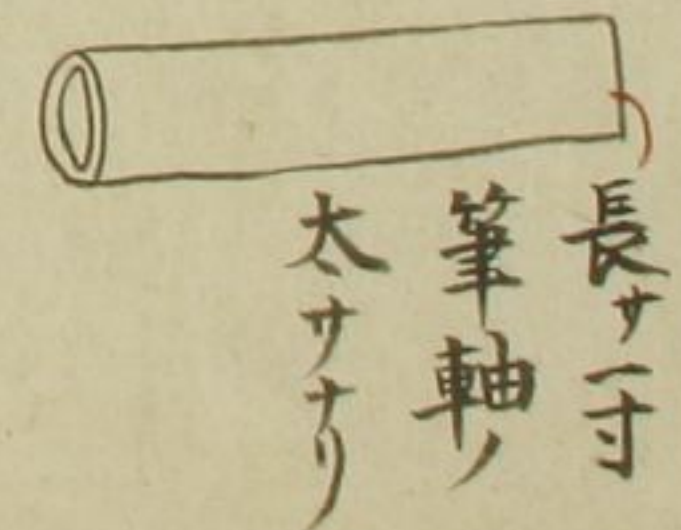
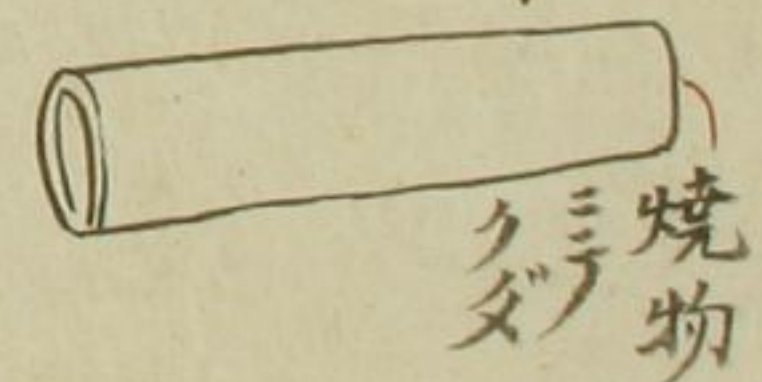
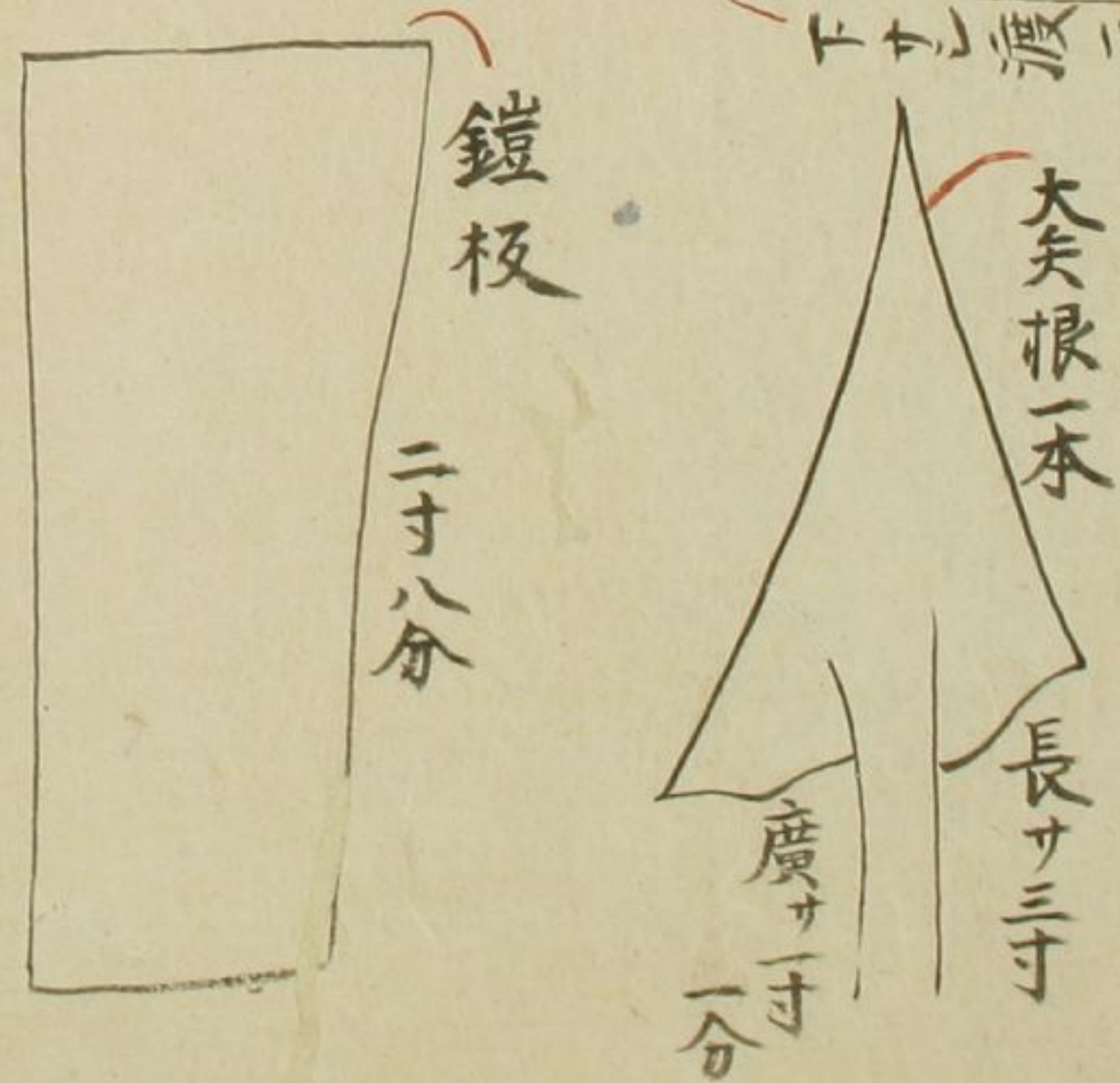
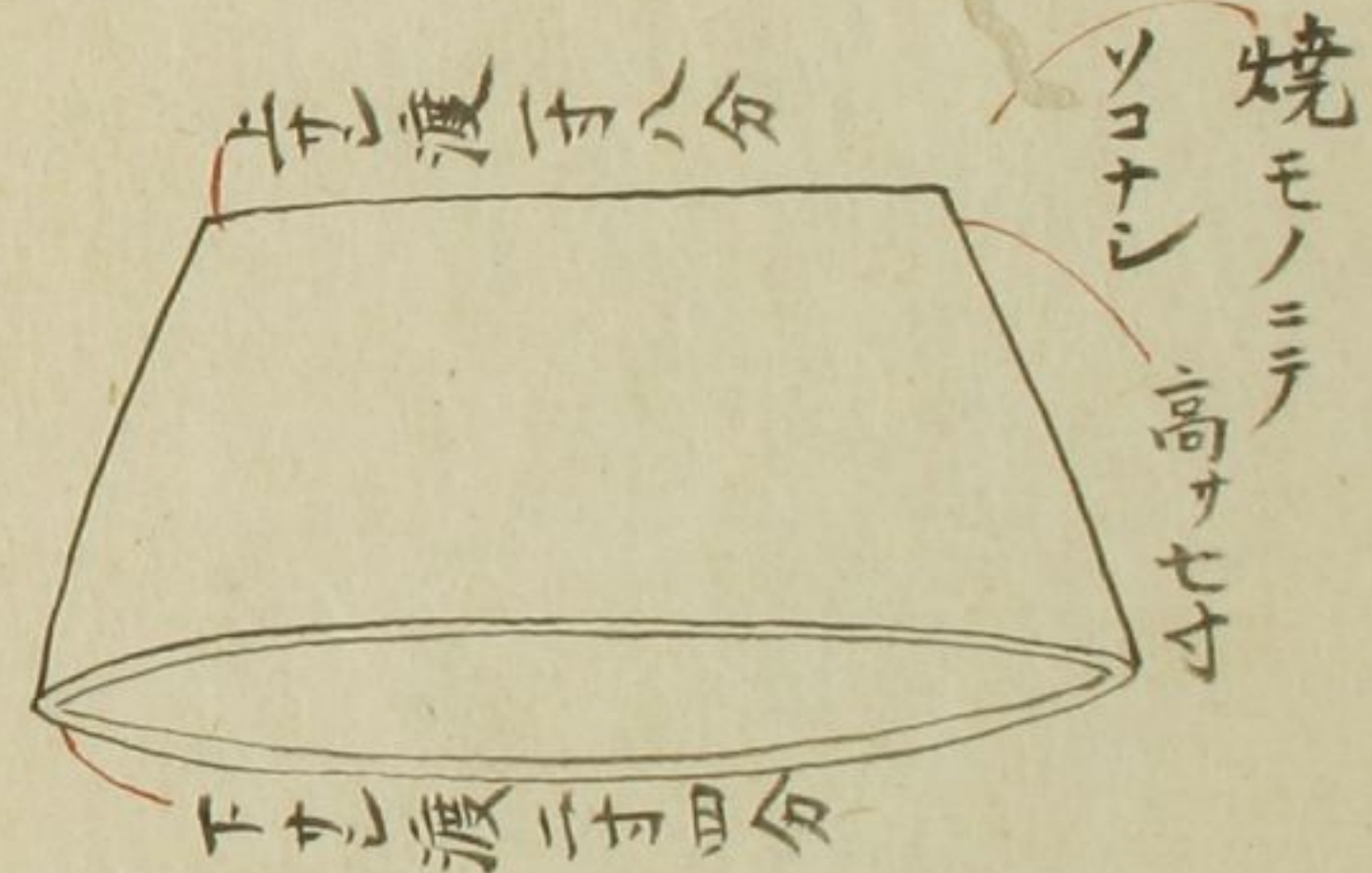
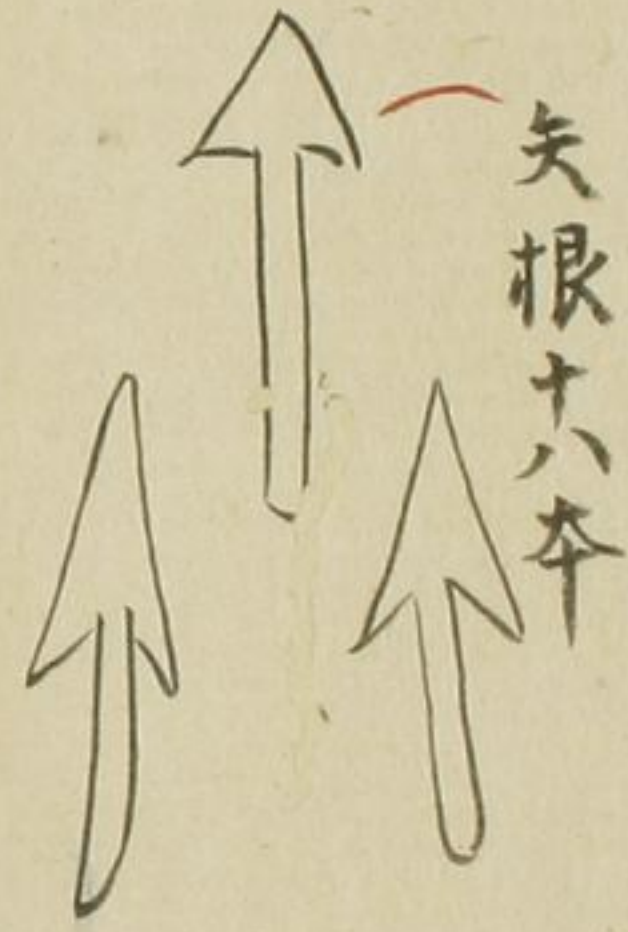
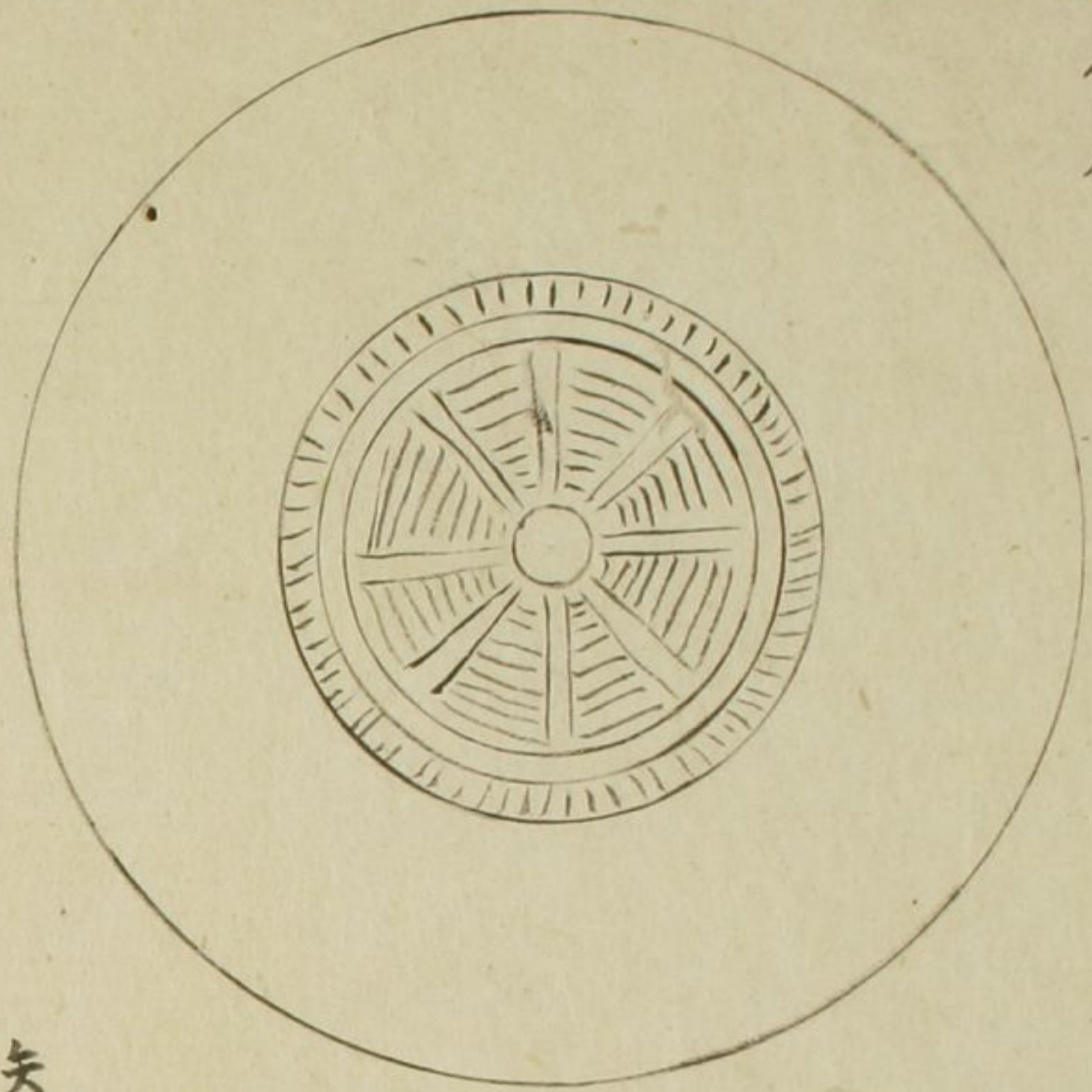
花瓶 真朱色

高九寸

赤銅鏡

寸ニ渡二寸三分

裏



此外鎧破二十二  
太刀ノ折レ一ツ

右ハ下侍塚より出ル物上ノ塚ハ長サ一尺八寸横一尺高ハ八寸  
松板の箱ニ入張有リク松脂を四方へとりめりけ塚へ  
埋メ下侍塚より出ル物ハ長サ一尺横。○言サセす

箱工入右の如くして埋ありて元禄五申六月廿三日  
 西山様馬頭村（山城）廿四日地藏院（山城）廿五日  
 湯津上村石碑（山城）廿六日作重貞先（馬）  
 下桑原町可仕等々村長峯より他親委倉村  
 通了湯津上（<sup>村</sup>）山城石碑（山城）廿七日  
 湯津上（山城）廿八日役所上仕（山城）廿九日重貞  
 山城（山城）三十日（山城）廿一日重貞（山城）廿二日  
 山城（山城）廿三日（山城）廿四日馬頭村百女（<sup>村</sup>）  
 山城（山城）廿六日山城（山城）廿七日（山城）廿八日  
 百助（山城）廿九日（山城）三十日見仕浪子拜領仕（山城）

石碑（山城）元禄四年也寛延四年未春石碑（<sup>山城</sup>）  
 重貞（山城）大金久左衛門事  
 山城奉行渡辺与次右衛門



納那須國造瑩

二鏡圖

納那須國造瑩中鏡圖

那須國造墓有碑不勒名

啓墓無誌仍舊復修瑩

銘曰

那須國造墓有碑不勒名  
啓墓無誌仍舊復修瑩  
嗚呼斯何人有矣邪每哭

徑五

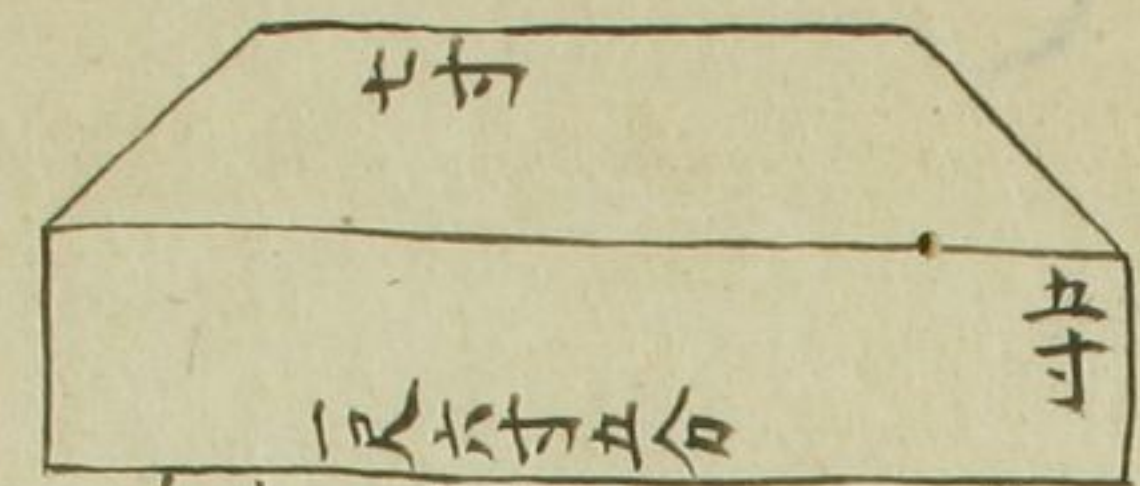
死者若有知蓋望我哀滅  
元祿辛未冬某月某日

源光圓識

右碑之下二納

下野那須郡湯津上村有大墓  
不知何人之墓也且為割度是假  
伯連師之墓也是歲元祿辛申春  
宗淳啓桑瑩域  
若有誌不知其名氏則欲建碑勒  
文而墓有銘誌焉故是瘞藏仍  
旧新加封築四周載松防其崩壞  
云

前中納言從三位涼朝臣光圓識



七寸

五寸

七寸七分

七寸七分

四尺七寸八分

九寸四分

二尺二寸

七寸

二尺一寸

一尺三寸

二尺一寸

碑高八行十九字都百五十二字  
碑高四尺卅影石

墳長八間橫七間

元祿四年辛未三月水戸義公命有司及大金重負創  
墳上之土依舊加封築建一小堂安碑其中

七

納那須國造塋

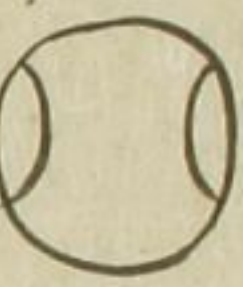
中鏡圖

背

那須國造墓有碑不勒名  
 啓墓索無誌仍舊復修塋  
 嗚呼斯何人有靈則無靈

死者若有知盍鑒我哀誠

元祿辛未冬某月某日

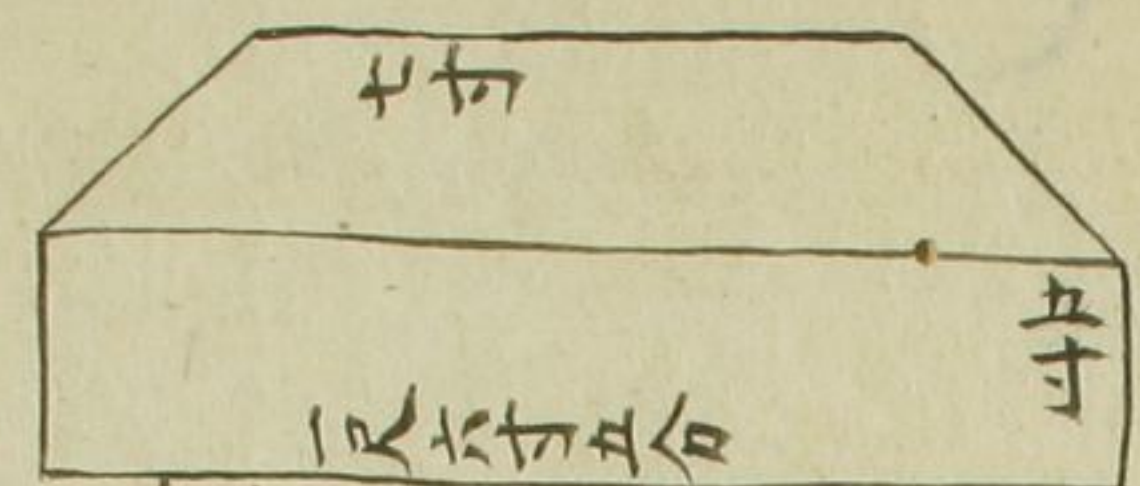


源

識

徑五寸

碑字八行十九字都百五十二字  
 碑高四尺卅影石



七尺

五寸

尺三寸五分

七寸七分

四尺七寸八分

九寸四分

尺三寸五分

七寸

尺二寸

一尺三寸

三尺

墳長八間橫七間

元祿四年辛未三月水戸義公命有司及大金重負創  
 墳上之土依舊加封築建一小堂安碑其中

七

那須國造碑釋文

永昌元年 朱鳥四年也。朱四二字上頭一點皆碑面剥落之跡耳。據史持統三年歲次己丑。實朱鳥四年也。明年庚寅正月朔持統即位。先是無改前朝之号。蓋以其攝也。

飛鳥淨御原大宮

按史持統尊号稱曰藤原大宮而稱

飛鳥淨御原大宮亦無改前朝之号也

那須國造

那須國造也。按國造本紀景行之世始置那

須國造焉

追大壹 樞史天武十四年正月更改爵位之号其諸臣之位正位直位勤位務位追位進位每位有大廣各四階凡二十四階

那須直 那須直也姓氏錄云直者謂君也古者直姓者皆是也天武十二年十月更改諸氏族姓以為八等曰真人曰朝臣曰宿祢曰忌寸曰道師曰臣曰連曰稻置而國造直姓者無改本姓也

津提 常提人名也常猶天武紀常那公高見之常也提猶欲明紀膳臣也把提之提也

續體紀在四年文  
云迎討背評誣云  
背評地名亦能備  
己富里日本紀通證云評与郡同訓見體紀評督領見延曆儀式帳梁史新羅傳云俗其邑在內曰咏評

太神宮儀式帳云難波朝廷天下立評櫻安亭按續日本紀卷一十一評督訓古保利乃乎依同廢立十季  
室字八年紀水高郡作水高評以上諸書考之郡評二字古通用可知

東國景行五十五年二月拜豐城之子彥狹島王為東山道十五國都督蓋襲封也王將就國中路病薨百姓悲王不來竊盜其屍葬之上毛野國明年八月乃命王世子御諸別王專領東國世子克繼前業以善政聞蝦夷率服尽献其地邊瀛又安於今子孫猶在東國云考姓氏錄豐城之後凡二十八姓皆出自上毛野下毛野等國焉那須直蓋是豐城之後復襲旧封拜都督之命亦然則評督之評當是都字都督旧說与太宰同又按欽明紀地名背評誣云邊郡蓋古訓也評督猶言郡宰也郡評字似史碑皆訛亦未可知也

歲次庚子年 文武四年也

辰節弥故 辰節猶言辰時也、弥故物故也、盖言某年某

月某日某時卒也

意斯麻呂 意斯人名、古者以意斯名頗多、麻呂古男子

通稱、盖是其僚屬也

銘德 銘德也

殞公 殞亡也、猶言凶君也

廣氏尊胤 廣氏盖謂廣末津公也、姓氏錄曰、豐城命三

世、原赤麻里依居地、稱廣末津公

山岡俊明云、國造雖姓名未可知、而天武帝時貴人公子也、故有廣氏尊胤之言、盖或為大友皇子之黨、天武治平之後、被擯斥、迫于持統之朝、蒙赦、

再任、故有授評督被賜及一世之中、重被貳照一命之期、連見再甦之文

有再造之功也

嫡子 嫡子也

不改其語 不改其道也、所謂三年無改於父之道也

銘夏堯心 維雖力剪堯心也、銘或雖字

澄神照軋 凝神照乾也

六月童子 充兒童子也 六或亦字

意育助神 意育助坤也 意憶古字

作徒之夫 作徒之夫也

合言喻字 合言喻焉也、猶言食曰喻也

故無翼長飛

嫡子 嫡子也 嬌驕並同

燕恩寺三藏傳  
卷七述聖曰夫  
以名與聖異而長  
飛道無根而水  
固

无根更固 无根更固也

跋那須國造碑後

右那須國造碑貞享中故常山漁公得之封內摸而傳之  
乃建碑亭以置守戶碑已埋沒九百九十餘年而復見于  
世矣嗟夫物之顯晦固各有時耶美今所得一本所謂傳  
摸補足非其真者恨未見石本也其改曰元年上二字不  
甚分明乃摸印見之永昌二字也然本邦無永昌号鳥飛  
鳥淨見原天武朝也天武有朱鳥号永昌字形稍似朱鳥  
想是歲月之久字體訛缺也因推為朱鳥歸後考之朱鳥  
元年歲在丙戌而此曰己丑則非朱鳥也明矣今按唐武  
后永昌元年歲在己丑而當持統三年此時本邦年号闕

故假用吳域年号乎，美竊疑以謂，維我東方建國已未，未始有稱藩異邦奉其正朔者也，偽周之号亦何以假為？若其果然，則文武四年只用甲子何也？以余考之，或以為永昌元年者，即是朱鳥四年也，持統稱制無改前朝之号，蓋以其攝也，樞史持統四年庚寅正月朔，始即天位，亦足以徵矣。歷代綿遠，文多剝缺，不可尽解，但其四字僅存三畫，而右旁轉折，處隱若挑勾，勢上頭一點，乃是剝落之跡，遂使觀者以為元字耳。越人以為鳧，楚人以為鴈，就知鴻飛冥冥哉。美嘗聞之，孔子曰：惟谷，与名不可以假人。魯仲連存國一男子，欲蹈海而死，義不帝秦之故也。堂々天朝，豈復有假以偽周之号哉？我季淺陋，性且不好臧否人物，雖然事之關係則重矣。大矣，敢不得不辨。

享保辛丑秋七月二十二日源君美書

讀那須国造碑

心越禪師

碑殘草宿在荒村、千古遺風今尚存、時音君臣期不再、空令後世續餘論。

新瀨手簡三鎖要紀年終に見ふ所のものを見出し、由頭を尋ね  
り、その中に入用とあり、其の意を尋ね、初志とあるが如く、  
是又國信は及り日本奉号の事、その中に信ありぬものなり、  
お洞首のその右に但一朝野の言、その中に信ありぬものなり、  
唐平の言、その中に信ありぬものなり、其の意を尋ね、  
野の言、その中に信ありぬものなり、其の意を尋ね、  
佛字は因古縁起并、其の意を尋ね、其の意を尋ね、  
この永昌四年もあつた、この中に此の字は年號、その中に合、  
此永昌元年の石刻は考、此百とや、その中に鎖要紀年、奉邦年

跡、その中に師、その中に寺代の年、その中に年、その中に日本の年号の字、  
その中に考、その中に考、その中に考、その中に考、その中に考、  
その中に考、その中に考、その中に考、その中に考、その中に考、



田舎

11

12

13

14

